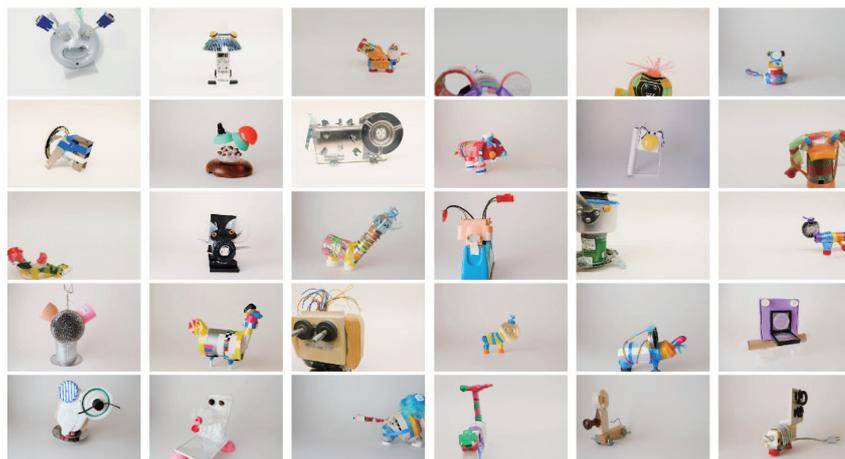


美術専攻 ヴィジュアルデザイン研究領域

チン ヨウ

陳 蓉



Seeds without names

クレヨン、鉛筆、色鉛筆

Seeds without names

私はこれまで、自然や生命に対する継続的な関心と感受性を通して、「生命はいかにして誕生するのか」という問いを深めてきた。通学路である麻溝台において、地面に落ちている鳥の糞に着目し観察する中で、その内部に未消化の種子が含まれていることに気づいた。種子は再生の可能性を内包し、生命が循環する存在であることを示しており、日常のささやかな発見が生命の誕生について考える契機となった。

自然を観察する中で、生命の誕生は特定の生命体に限定された現象ではないことにも気づいた。果実が川に落ちて流されることや、動物が移動する際に毛に種子が付着して運ばれることなど、偶然の連鎖が生命の発生を支えている。これらの現象は、生命が意図や計画によって生まれるのではなく、環境や時間の作用によって生成されることを示している。

一見無価値に見える鳥の糞に内包された生命の可能性に心を動かされ、私は生命の生成についての実践的な制作を始めた。私にとって生命とは、必ずしも生命体そのものからのみ生まれるものではなく、廃棄物やコンクリート、配管といった人工物の中にも、生命的な現象や生成の契機が潜んでいると考えている。ひび割れた構造物の隙間から植物が芽吹く現象は、生命が物質や時間、そこに積み重なった物語と深く結びついていることを示している。

本作品の中心概念には「Abiogenesis（自然発生論）」を据えている。これは本来、非生命物質から生命が自然に生まれる過程を指す概念であり、私はこの考え方を、生命の存在を前提とするのではなく、生成そのものの過程に目を向けるための思想的枠組みとして捉えている。

制作では、日常的に生じる廃棄物を素材とし、結束・接着・接合といった手法を用いて立体的な生物の形態を構成した。さらに、その立体作品を起点として平面作品へと展開し、絵画表現を通して生命に対する感覚や思考を可視化している。作品内には、種子や毛、流動性といったモチーフが繰り返し登場し、それらは生命を構成する要素の一部として描かれている。

廃棄物は「種子」のように多様な形態と可能性を持ち、単なる物の再利用ではなく、物質・時間・感情が交錯する中で新たな生命のイメージを生み出す存在である。それらは移動し、循環しながら、繰り返し生命として現れる。本作品は、生命がどこから、どのように生まれ、いかにして循環し続けるのかを問い直す試みである。